

時計の子供

佐藤 久子

ヒカウキミばしや戦争ゴッコで遊び疲れた英夫さんは、お夕飯がすむさもうお隣の部屋でスヤ／＼ねむつてしまひました。

それから何時間過ぎたでせう。

英夫さんはポツカリ眼がさめました。お家の中はシーンと静まりかへつて、側にはお父様もお母様ももうお休みになつてゐらつしやいました。英夫さんは、

「なァーんだ！ まだ夜中なのに」

と思つてまたお目々をつぶりましたが、なんだか今までカッチン／＼なつてゐたお部屋の柱時

計が、ピッタリ止つてしまつたので變だなと思ひながらそつとお目々をあけて頭の上の時計を見てみました。

「おや」!!

時計のガラス蓋がひみりでスーッと開いたんです。

英夫さんはなんだかこはくなつて来て、もう少しで「お母さん！」と大きな聲を出しさうになりました。

「さあ子供たち、何時もの時間がやつてきた、今日も元氣に遊ぶのだよ」

其の時そのお時計の中から小さい可愛らしい聲が聞えて來ましたので、英夫さんは一層ビツクリしましたが、あんまり可愛い、聲だつたのでこはいのも忘れて、そつとおふきんから顔を出してゐました。

「ぞら、お父さんが一番先におりるから、みんなもあそびについておいで」

そんな聲が聞えたかと思つたら、お背の高い、やせつぼちの針がスーッと英夫さんの枕もこ

におりて来ました。そのあから頭の大きな小さい針が、つゞいて1の字2の字3の字4の字
5 6 7 8 9 10 11、みんなスルリ〜におりて来ました。

一番先におりてきた大きな針はお父様だつたのね、その次の小さい針がお母様、それから十
二人の子供たち……

なんだかみつても面白さうで、英夫さんは何時の間にか、半分位顔を出して見てみました。

「今夜は何して遊ぼうか」

「ボク、戦争ゴッコがい〜」

8の字が圓い身體でビヨン〜ミビ上りながら元氣な聲でさう云ひますこ。

「僕も」

「僕も」

みんなも大よろこびで、戦争ゴッコをするこゝになりました。

「それぢや二組に分れるのだよ、お父さんとお母さんはみんながぎの位強い子になつたかこ〜」

でみてゐますから」

お父様の針がさう云つたかきおもふこ、もう十二人の子供たちは半分に別れて、こつちは英夫さんのお母様のおふさんのかげに、もう一つはお父様のおふさんのかげにかくれました。

しばらく両方さもこそく何かしてゐましたが、英夫さんにはよく聞えませんでした。そのうち、さつちかの時計の子供が

「ドドドドーン〜」

ミ織砲のまねをしますこ、別の方の子供たちも負けずに

「バチ〜〜ダダダ、バチ〜〜ダダダ」

ミ機關銃のまねをします。英夫さんは「時計の子供たち何時演習を見たんだらう」ミ不思議に思ひました。

あら！、お父様のおふさんのかげからミの字が半分身體を出して敵の方をみてゐます。

「あぶないよ兄さん、うたれるぞ」

「大丈夫だよ、まだ敵はやつて来さうにもない」

「3の字は強んだな」ミ英夫さんは一人で感心してゐました。するゝお母様のおふさんのかけから急に「ワァーッ」ミ云ふ元気な聲ミ一緒に小さな兵隊さんたちが、いちごきにこちらに攻めて来たのです。するゝお父様のおふさんのかけからもさつきの3の字が先頭に

「ヤァー」

「ヤァー」

ミ云ひながらころびさうな格好でお山をおりて来ました。(お山つてお父様のおふさんのこみよ)

「進メエ」

「進メエ」

兩方の子供達は真中の英夫さんのおなかの上に突貫して来ました。

「ひがらな」

英夫さんがビククリして大いそぎで頭をふしんの中につゝ込みましたが時計の子供たちは平氣であればはじめます。

「くすぐつたいくよ」

英夫さんはもうたまらなくなつて大きな聲を出してしまひました。

あばれてゐた子供達はお山がグラク／＼動き出したり英夫さんが大きな聲を出したりしたのでビククリして、ひつくりかへつたり、ころげおちたりしながら、あわてゝ逃げ出しました。

英夫さんはおきこの上に起上り

「ね、君たちそんなにかけ出さないで、もつこつちへゐらつしやい、君たちは何時も夜中に起きて遊ぶの？ 随分元氣なんだね、僕さつきから見ってたんだよ」

「坊ちゃん起こしてしまつてごめんさい。あんまり夢中になつてゐるものだから」

「うゝんいゝんだよ」

英夫さんはもうすっかり時計の子供たちミ仲よしになつてしまつて、今度はみんなおふさん

の上に輪になつてお話をはじめました。

「でも坊ちゃん、僕たちは朝早くから一生懸命働いてゐるのですけれど、坊ちゃんたちがぎんなごみをしてゐらつしやるかみんな見てゐるんですよ。

今朝も坊ちゃんはお母さんに、幾度おこされても「ウン／＼」つておへんじばかりして、おふさんかぶつてしまつて起きなかつたでせう」

「君たちみてたの、いやだなあ、僕ちつこも知らなかつた」

「それから坊ちゃんがおいたするのなんかもすっかり知つてゐるんですよ」

お日様がお窓からニコ／＼入つてゐらして英夫さんはやつこお目々があきました。

おふさんから頭を上げてあたりをみまはしましたが、時計の子供もお父さん針もお母さん針もだーれもゐません。

英夫さんは大いそぎでこび起きるゝあわて、柱時計を見上げました。123の数字も針も何

時もご同じ様にキチンならんで、すましたお顔でカッチン／＼カッチン／＼音をたてゝゐます。

「おはよう、君たち随分はやいんだね、もう働いてるの」

英夫さんが大きな聲でさう云ひましたが、お時計の中からあの可愛い、聲は聞えて來ませんでした。

「それぢやゆうべのは……夢だつたのかしら」

英夫さんはさう思ひながら心配さうにもう一度見上げました。

でもやつぱりゆうべの子供たちがだまゝつて英夫さんのお顔をみてる様な氣がして、英夫さんは大いそぎで一人で洋服を着ました、ズボンもお靴下も一人ではきました。

「まあ!! 英夫さん今日はさうしたのでせう。こんなにお利巧さんになつて」

丁度その時入つてゐらしたお母さまは本當にビックリなさいました。

「僕、今日からお利巧さんになるの、だつて時計の子供たちみてるもの」

英夫さんはあの晩時計の子供さ仲よしになつてから、ほんまにいゝ子になつたのですつて。